

都市デザイン研マガジンは「不易流行」たれ

Holding on the principle of fluidity and immutability

text_kikuchibara

2005年4月15日の第1号発行から4年2ヶ月、都市デザイン研マガジンは遂に記念すべき100号を迎えた。「これまでの100号、これからの100号」を先生方や歴代編集長の方々に語っていただいた。

Four years have passed since the first issues of Urban Design Lab magazine on April 15th in 2005 and the magazine celebrates its 100th issue. Teachers and the former chief editors told us its four-years history and the vision for the vol. 200.

歴代編集長揃い踏み マガジンに懸けた思いを語る

The former chief editors looked back on the memories of the magazine.



酒井 憲一+塩澤 諒子+蛸灰谷 愛

[聞き手、文章: 菊地原 徹郎]

2009年5月28日(木)、14号館会議室にて、マガジン歴代編集長による対談が開かれた。酒井憲一氏を始め歴代編集長やOB/OGの方々が集まり、この4年間のマガジン編集部活動を振り返りながら、100号達成を祝った。また、会後半には西村先生、窪田先生、中島先生も参加し、100号記念に花を添えた。

歴代編集長

創刊号～23号 酒井憲一 (2005.4.15～2006.3.15)	51号～71号 塩澤諒子 (2007.5.25～2008.3.24)
24号～50号 坂内良明 (2006.4.1～2007.5.10)	72号～95号 蛸灰谷愛 (2008.4.10～2009.3.25)

都市デザイン研の「沸き立つマグマ」を内外に伝えたい!

一マガジンを発行するに至った経緯を教えてください。
酒井一ハノイの研究室旅行で色々な人と付き合っ、マガジンの創刊を決意した。素晴らしい情報に溢れかえっている研究室の方々が、内外に知られざる存在であることは勿体ないと感じた。沸き立つ充満したマグマの都市デザイン研究室をよく外に吐き出さないで平常心でいられるものだと不思議だった。

一現在の発行形態(毎月2回、A4両面)を採用した理由は?

酒井一月1回発行だとだらけてしまうし、また夏休みや冬休みも学生にはないのだから、春夏秋冬1年間休まず続けることをまず心掛けた。A4の2ページが学生にとってはちょうど良い分量。一つの記事も三行記事(150字程度)でコンパクトにした。三行ならみんな書いてくれるでしょ?(笑)

塩澤一29号からマガジンのデザインを変えた。レイアウトの自由度が上がり載せられる文章量が増えた分、文字が細かいという意見が出てきた。頼まれる方は200字、300字で書けというのも大変だし、今振り返ると酒井さんの頃はコンパクトにまとまっていた。

一編集部員になったきっかけを教えてください。

塩澤一坂内さんが作成した新入生アンケートに答えたら、いつの間にか編集部員になっていました(笑)。ただ、

取材を通じて色々な人に話すきっかけになって良かった。

酒井一私と坂内君、中島先生で毎週編集会議を開いていたが、坂内君が次の方にバトンタッチしたこと、後輩を育てたことは素晴らしい。

蛸灰谷一私にとって最初のマガジンのイメージは、M1が動める係の一つとしての認識だった。ただ、デザインしたい、ものづくりをしたい気持ちがあり、その作業に憧れて編集部員になりました。

編集部作業に「彩り」を

一編集部時代の思い出の記事はありますか?

酒井一12号。先生方の学生時代の写真を掲載した記事。先輩に道をつける道で、あれこそ文化系の記事。誰も考えつかなかった。坂内さんの記事では、彼が西村先生に単独で会見に挑んだ記事(19号)は素晴らしいかった。みんなが聞きたいことをズバズバ聞くべきであると彼に伝え、見事にそれを実行した。

塩澤一38号のタイ研究室旅行。A3で構成した盛りだくさんな記事。旅行の面白さを伝えたかった。

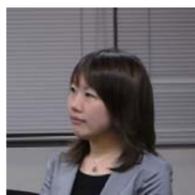
蛸灰谷一78号。国際交流などのインターナショナルな記事が多かったため、地球のアイコンの記事を利用した。08年度当初はマガジンのデザインを変えようかという話をしていて、29号から続く塩澤さん作のデザインは完璧だったので、色合いや季節のイラストなどで少し



酒井 憲一氏



塩澤 諒子氏



蛸灰谷 愛氏



菊地原 徹郎

一都市デザイン研マガジン発行100号記念特集

-Celebration for the 100th issue of Urban Design Lab. Magazine

ずつ変化を付けていった。ただ実際は大変になりがちな編集作業に遊び心がほしかったから(笑)昨年度のマガジンは、細かいところの工夫に注目してほしいです。

「デザ研」略称問題

塩澤一その29号で、都市デザイン研マガジンという名前が適切なのか坂内さんと議論して、この号だけでは「都市デザイン研究室マガジン」に変えてみました。

酒井一都市デザイン研マガジンというのも、西村先生の命名なんです。ただ略称がほしかった。坂内君が「デザ研」という略称を持ち出したが、却下した。「デザ」っていう意味が分からない。今は市民権を得たが、それまでは「デザ研」に対する戦いだ(笑)

塩澤一29号の時に略称が話題になり、私が「デザ研」という名前を出したら、坂内さんが「酒井さんが怒るぞ」と。

蛸灰谷一でも、そのような話があったことを知らずに、私の代から「デザ研」という名前を誌面上で使い始めてしまった。今ではすっかり定着してしまい…(苦笑)。

一人で書いたらデモクラシーではない

一蛸灰谷さんの編集長の抱負「隔々まで、満遍なく、記事の充実化を図りたい」はどのような意図があったのですか?

蛸灰谷一忙しくなってくると記事を頼む人が同じメンバーに頼りがちになってしまう。そうすると研究室の活動を伝えきれない。博士の人や留学生の普段の活動が分からなかったため、細かな情報収集が大事だと考えていた。

一塩澤さんの「生の声を届ける」という抱負は?

塩澤一坂内編集長時代は、他の人に依頼した記事を坂内さんが上手くまとめていたが、私はみなさんが書い



▲100号すべてを印刷すると、会議机二つ分になる

てくれたものをそのまま届けたいと考えていた。

酒井一私が編集長の時には既に研究室内に精通していた。大野村や柄、ハノイなど自ら行ったが、一人で書いたらデモクラシーではない。みんなが参加できるものようにした。

決して恣意的、内輪的になるな

一最近「マガジンに主張や思想がない」という声を良く聞きます。

塩澤一私の代でも、酒井節や坂内節が途切れ「思想がない」と言われてきましたが、主張をすべきなのかどうか迷っていた。

蛸灰谷一同じく思想がないと言われていたが、正確に内容を伝えたいという思いの方が強かった。

酒井一内容が世界的な研究室だから、恣意的、内輪的な記事には絶対するべきでないと常々伝えてきた。客観的な情報、基本データ(いつ、どこで、何が、どれだけ、どうした)をしっかり記述することを大切にしてきた。硬軟両方あるほうがよいので、コラムなどで主観的な記事を書けばよい。街に対する知見を話すことは出来るが、評論家になるのは出来るだけ避けた方がよい。編集長に思想がなければ困るが、文章で主張するのではなく誌面の構成で主張をすべきだ。

不易流行の都市デザイン研マガジン

一本日はありがとうございました。最後に今後のマガジンに向けて一言お願いします。

酒井一「不易流行」という思想をもって編集していた。絶対動じないのだけれど、見たところ新しいことをどんどん取り入れる。しかし流行に流されてはいけない。

(裏面)先生方の対談 →



▲対談には現役生・卒業生も参加し、マガジン100号を祝った

思い出のマガジン

▲先生方の学生時代の写真をスクープ(第12号:05.10.15発行)

▲西村先生への突撃取材(第19号:06.1.15発行)

▲充実のタイ研究室旅行特集(第38号:2006.11.1)

▲地球のアイコンで誌面に変化を(第78号:2008.7.10)

100号到達、そして200号へ—研究室マガジンの役割を再考する

Reaching to the 100th and Going toward the 200th -Reconsidering Magazine's Role



■ひょっとすると、日本の大学初の100号
西村教授
「日本の中では珍しいと思う。ただ、これをやらないと情報が共有できないというのは悲しいことだけ。対外的な意味で言うとこれだけのインフォメーションをしっかりと紹介できているのはすごいのではないか。」
「留学生が見た東京や東大、研究室の在り方や特色など、そういうことを書いてもらおうと面白いのではないか。」

■マガジンと接点少ない世代にも寄稿依頼を
窪田准教授
「私たちの世代になると、全員知らない人がやっていると感じてしまう。実際そうなのかもしれない。いなかった世代に何か記事を書いてもらうとかする。それをある程度続けることでその上の世代も見始めるのではないか。」

■本になったりしないですかね？自費出版で
中島助教
「もう少し、主張を出す記事と、客観的に書く記事をわけたほうがいい。全部の記事で主張する必要はなくて。例えば、OBの人が書く記事なんかは多分違う書き方になると思うし。もう少し、書き手が見えるような記事であることが大事。」
「意識的に全員が(記事を)書くようにしてもいいんじゃないかな？」

■続けよう。ほんとこれは重要なことだよ、続けることは
阿部助教
「いや、ほんと(研究室の)外にいると見る」「僕の場合ぎりぎり留学している間に創刊したから一番よかった。向こうにいたらかなり見る。最初、酒井さんだった時には、ほんと定期的に発行されていて気づくと更新されていた。内部の事情が良く分かってよかった。」
「情報欄が欲しいですね。羅列でもいいから。情報として。マガジン編集部だけではきついかもしれないけど。」

マガジンのコレカラ。祝辞を頂きました。



■100号も続いたことが価値あること
北沢教授
歴代の編集部員はご苦労様でした。蓄積が力になっていくと思います。200号を目指して頑張ってください。編集方針は現在のもので大変に結構であると思います。あえて言えば、毎回1つくらいは少し丁寧に経過や詳細を説明して、研究室以外の方々にも内容や関心が伝わるものがあるといいですね。

■マガジン100号発行おめでとうございます
野原助教

実は、なかなか研究室内部同士でも、お互いが何をやっているかわからなくなってしまっているほど、大盛況な近年のわが研究室ですが、そういった折にも、マガジンがあることでお互いの心もつながるばかりか、OBOGをはじめ、研究室のことをいつも気にかけて下さる方々との心のつながりが生まれる「絆」のマガジンだと思っています。
今後も、火の絶えない研究室の現状をルポすると同時に、いつも気にかけて下さる応援団の方々やココロにつながる、読者目線の、そして自信をもって世界に発信できるメッセージを伝え続けて下さい。

'09年度第3回、4回研究室会議 3rd and 4th Lab. Meeting

text_abe

6月1日、2日に渡り、今年度第3回、4回研究室会議が行われ、熱い議論が交わされました。今回は博士課程の他、修士2年の先輩方が全員発表されました。先輩方の発表を聞き、様々な研究テーマがあることを知り、M1にとっては次回の研究室会議に備え、自分の研究テーマについて考えさせられる多くの刺激を受けた研究室会議だったと思います。次回会議は6月25日。発表者はM1全員です。D2一名、D1一名、M2八名の各発表者と題目は以下の通りです。

<p>第3回(6月1日) ■D2 Mireille Tchapi "Typo-morphologies from centralities in metropolises : Tokyo,Bangkok,Jakarta..." ■M2 菊地原徹郎 「地方都市における産業構造変化と空間変容の実態に関する研究(仮)」 ■M2 竹本千里 「東京臨海部の水際に立地する工業資産の景観的活用に関する研究(仮)」 ■M2 土信田浩之 「町家における現代的住まわれ方の特徴とその街並みに関する研究—岐阜県高山市を例として—」 ■M2 中島和也 「戦後における露店市場の形成とその解体・収容に関する研究—被災都市と非被災都市の比較検討—」</p>	<p>第4回(6月2日) ■D1 Tariq Mahbub Khan "Conservation-oriented Urban Regeneration in Asia : An Investigation towards a Sustainable Approach to Revitalize Old Dhaka" ■M2 西川亮 「欧州評議会(Council of Europe)による文化政策に関する施策の変遷—文化の道(Cultural Routes)の策定とその効果の検証—」 ■M2 藤井高広 「建設現場における仮囲いに関する研究」 ■M2 六田康裕 「景観地区の指定プロセスとその制度としての有用性に関する研究」 ■M2 Jay Farris "The integration of agricultural into a community as a way toward farmland preservation : Community participation in agricultural productivity"</p>
---	--

「都市と海」大連スタジオ現地ワークショップ開催！！

“City & Ocean” Dalian International Design Studio Workshop M1 永野真義

国際設計演習スタジオ「都市と海」の現地ワークショップが、5月27日から31日にかけて大連で開催されました。今回都市デザイン研から参加したのはナッタポン(D1)、大熊、熊谷、鈴木、永野(以上M1)の計5名。このスタジオは建築学科・難波和彦教授と都市工学科・石川幹子教授の共催演習で中国・大連市の敷地を対象に建築・社基・都市の三学科の学生30名程度が参加しています。4月から準備を重ねて来た成果を携え、一行は現地で大連理工大の学生とワークショップを行いました。

■北京編 Beijing Tour

23日、ノーマン・フォスター作の北京国際空港に降り立った4名は、ホテルに向かうバスの中で中国的巨大スケールの街並みにびっくり。中心市街地までひたすらそんな風景が続き、迷いながらもたどり着いた4つ星ホテルはとても豪華。メンバーたちはワークショップのことなど一切忘れ、さっそく夜の街に繰り出したのでした。この夜以降何度となく苦戦したのが四川料理。激辛料理が次々と4人を襲い、特にもともと辛いものが苦手な鈴木はたびたび激怒。それでも何となく中国に来たなと実感する瞬間なのであります。

24、25日は故宮や天安門広場、万里の長城はもちろん、鳥の巣・水立方・CCTV・建外SOHOなどもしっかり見学。特に鳥の巣は内部にも入ることができたのですが、ただ一般開放するだけでイベントのようにぎやかな雰囲気が演出されていることに驚き。

25日夕方、もっとも安い寝台列車に乗り込みいよいよ大連へ。まさかの3段ベッドに一同目が点になりましたが、どこでも寝る永野はここでも不自由なく爆睡。翌朝5時40分に大連着で、いよいよワークショップに向けて気持ちが高まる…かと思いきや、意外とあっさりワークショップ初日を迎えることになってしまいました。



▲建外SOHO

▲万里の長城

▲韓鍋にキレル鈴木

■ワークショップ編 Workshop

まずは対象敷地である倉庫見学。現地の大連理工大学の学生たちとは初顔合わせ。幾分、緊張した雰囲気が続きましたが、夕方にはレセプションパーティがありいよいよ打ち解け始め、さらに出来上がった難波教授が登場、ギャグを連発し一同の緊張がほぐれていきました。

翌28日には市内見学をした後、いよいよ本格的にワークショップ開始。全11班で1グループは4~6名。理工大の学生たちはすでに一案を完成させていたようで、その案の紹介からスタート。とにかく理工大生のパネルはCGを見事に駆使していて、レイアウトも美しい。都市工の学生はそのスキルに圧倒されてしまいました。と同時にまだまだ表面的で、その意味付けをしていくにあたって自分たちがやらなければならないことを認識。英語に慣れない熊谷や永野は辞書を片手に、大熊はひたすら筆談を使い、必死で理工大生とコミュニケーションを図りました。

29日にはさっそく中間講評。ひたすら手書きで図面を書いているところや早くもPCで図面を出してくるところなど、進み具合は様々でした。

そして徹夜明け30日は15時から最終プレゼン。案を豹変させたチームもあり前日の案を深めたチームもあり、バリエーション豊かで聞いていて面白い最終講評となりました。最後には先生方が1人3票ずつで、生徒たちの案に投票。大熊班やナッタポン班は見事たくさん票を獲得しました。いずれにしても、ほんの2日間でしたが、すべてのグループが無事に発表し、必死のコミュニケーションの成果が何とか形になった瞬間でした。



▲全員集合



▲最終講評で発表するナッタポン

▲作業中の大熊班・鈴木班

編集後記

text_abe

はじめまして。今年度編集部員となりました阿部正隆です。100号記念特大号いかがでしたか？初仕事で記念すべき100号になるなんて、思ってもみませんでした。編集長対談では歴代編集長の方から熱い思いを受け取り、自分がこの歴史あるマガジンの編集に携われることを嬉しく思います。4年生の配属に関しては号外という形でVol.99.9として発行してみました。そちらもご覧下さい。また感想、アドバイスなどありましたら、お聞かせ下さい。よろしく申し上げます！！

都市デザイン研究室 6月の予定

- 6月10日-14日 足助PJ現地調査
- 6月13日-14日 佐原PJ現地調査
- 6月23日 都市工大運動会
- 6月25日 第5回研究室会議
- 6月26日-29日 高山PJ現地調査